2015年11月15日中原教会メッセージ

聖書箇所：第二列王記9:17-24

　　　　　　　　　　　　　　**「エフー　元気ですか」**

　本日のメッセージ中心は9章17-24節ですが、この箇所を理解するのには9章全体を理解する必要がありますので範囲を広げてみて行きたい、と思います。その前に、9章の時代背景についてご説明いたします。ソロモン王の後分裂した南北イスラエルは北がイスラエル王国、南がユダ王国と称せられました。本日の聖書の箇所に関係するのは北王国のイスラエル王国です。国の力は圧倒的に北のイスラエル王国が強大でしたが、国内が混乱し、宗教的にもイスラエルのヤハヴェ信仰が徹底せず、列王記記者からの強い批判がされています。北王国はソロモン時代の強制労働監督者のヤラベアムが初代の王となります。その後、その子のナダブが後を継ぎますが、バアシャという男に暗殺されます。そしてバアシャが王となり、更にその子のエラが後を継ぎますが、将軍のひとりジムリに暗殺されます。そのジムリはわずか7日間しか王でおられず、軍が反乱を起こし、将軍オムリを王にします。オムリはジムリを攻め、自殺に追いやります。このオムリによりオムリ王朝が始まります。オムリ王朝は4代44年続きます。オムリ、その子アハブ、その子アハジヤ、その兄弟ヨラムと続きますが、その配下の司令官エフーに殺されてしまい、オムリ王朝はここで終わります。此の後に王となったのは将軍エフーです。エフーに始まるエフー王朝はその子エホアハズ、その子ヨアシ、その子ヤラベアムII世、更にその子ゼカリヤと5代、約200年続きます。エフー王朝の後は暗殺続きで、5人の王の後、最後はBC721年、アッシリアに滅ぼされてしまいます。

預言者エリアはオムリ王朝二代目のアハブの時代に主に活躍しますが、その後継者エリシャはアハブの時代からエフー王朝三代目のヨアシ王のところまで活動をします。その中心は王朝の創始者エフーの時代です。本日の聖書箇所のある9章は、エリシャがエフーを王と指名するところから始まります。なお、口語改訳聖書ではエフーはエヒウと訳されています。彼は、イエフと訳される時もあります。原語から見ると新改訳のエフーが忠実な発音です。まず9章の1節から6節までをみてみましょう。ここで、エリシャは若い使者を送って、エフーを新たな王に任命致します。当時はオムリ王朝最後の王ヨラムの時代でしたがエリシャは実に、エフーに反乱を勧めています。ラモテ・ギルアデはヨルダン川の東、ギルアデにある地で、イスラエルの祖ヤコブがラバンと所有地の契約の記念として石塚を作ったガルエドの近くと推定されています。荒地です。実は、エフーを王とすることは既にエリシャの先生であるエリアに主の言葉が臨んでいます。第一列王記19:16です。「主は彼（エリア）に仰せられた。「さあ、ダマスコの荒野へ帰って行け。そこに行き、ハザエルに油をそそいで、アラムの王とせよ。 16 また、ニムシの子エフーに油をそそいで、イスラエルの王とせよ。また、アベル・メホラの出のシャファテの子エリシャに油をそそいで、あなたに代わる預言者とせよ」と記されています。エリヤの後継者エリシャが指名された時、エフーもイスラエルの王として指名されています。エリシャはエリアの後継者として、これを実行したにすぎません。イスラエルの初代の王サウルが主の王への指名を預言者サムエルによって告げられたように、エフーも預言者エリシャによって王指名を告げられるのです。3節で、エリシャは使者である若者に、主の言葉を告げてから、「戸をあけて、ぐずぐずしていないで逃げなさい」と言っています。これを告げる場面が戦場であり、エフーはその指揮官であったからでしょう。ぐずぐずしていると戦争に巻き込まれてしまうからです。ここで注意を払わなければならないのは「主なる神」が王への指名をするのであって預言者が行うのではない、ということです。預言者は告げ知らせ、権威を与える祭儀を取り扱うのみである、ということです。では神様はどのような人物をこの世の統治者とするのでしょうか。旧約聖書をずうっとみても確たることは言えません。民衆の支持というのが条件か、と思うとそうでもない時もあります。信仰深さという事かと思うとそうでもないことも沢山あります。神様は救いの計画の実行の良き方法として特定の指導者をお選びになります。しかし、まず例外なく、その指導者は高慢の罪のため堕落し、権力的になり、圧政を行うようになり、神様はこれに対し、忍耐をもって、神様への立ち帰りを待つけれども、それはなされず、最後に、神様は別の指導者に取り換える、というのが一般的な流れです。今の日本の、世界の政治をみてもおなじようなことが起きています。第二列王記の記述でも、諸外国から強力な王朝と見られていたオムリ王朝は、堕落し、遂に神様は、預言者エリシャを通し、エリヤの頃から予定されていた、王のすげ替えを告げるのです。

　オムリ王朝の時代の軍事的に最大の敵はダマスコを中心とする北のシリアでした。アラムと称されます。これに加え、南のユダ王国と戦争をすることもありました。更には、これ以外に、死海の東のモアブ、死海の南のエドムともしばしば戦争をしていました。オムリ王朝を宗教的見地から見ると二代目のアハブが最悪でした。父オムリがフェニキアにある都市国家ティルスの王女イゼベルを息子アハブの妃としたことが偶像礼拝を引き起こします。イゼベルは実家の地のバアル信仰を強力に進めます。この時エリアがバアルの預言者を打ち負かし、ヤハヴェ信仰を守ったことは有名です。しかし、表はイスラエルの「主なる神」への信仰を守っているように見えても、バアル信仰は根強く残り、続きます。悪名高きイゼベルも健在です。主の言葉は若者の口を借りて更に続きます。7-10節をお読みします。「あなたは、主君アハブの家の者を打ち殺さなければならない。こうしてわたしは、わたしのしもべ、である預言者たちの血、イゼベルによって流された主のすべてのしもべたちの血の復讐をする。8 それでアハブの家はことごとく滅びうせる。わたしは、アハブに属する小わっぱから奴隷や自由の者に至るまでを、イスラエルで断ち滅ぼし、 9 アハブの家をネバテの子ヤロブアムの家のようにし、アヒヤの子バシャの家のようにする。10 犬がイズレエルの地所でイゼベルを食らい、だれも彼女を葬る者がいない。』」こう言って彼は戸をあけて逃げた」、とあります。この言葉は、後にエフーがオムリ王朝最後の王ヨラムを滅ぼした後、現実となります。9:33では「彼（エフー）が、「その女を突き落とせ」と言うと、彼ら（宦官たち）は彼女（イゼベル）を突き落とした。それで彼女の血は壁や馬にはねかかった。エフーは彼女を踏みつけた」とあります。9章の最後37節では「イゼベルの死体は、イズレエルの地所で畑の上にまかれた肥やしのようになり、だれも、これがイゼベルだと言えなくなる。』」 と言われています。エフーはイゼベルを異教信仰の権化として徹底的に残虐に扱います。神様は選ばれた民イスラエルの純潔な信仰を守り、高い倫理性をもった民族を守るために、時によりこのような残虐行為をも許容することもあったのです。逆に言えば、それだけバアル信仰は根強いものであった、ともいえます。バアル信仰は豊饒神であり、農耕神であり、自然神です。バアルはフェニキアの方で生まれ、カナンの地場信仰として広がった神様の名です。このような神様は世界中どこでもあり、日本でも昔ながらの神道のなかに生きています。素朴な自然を敬う信仰に留まる限りあまり問題ではないのですが、子供を生贄として捧げるとか、巫女のように魔術的な様相を帯びたり、奉げ物を受け取る祭司階級が特権化したり、更には、捧げものをすることのできない貧しい人々を救いから排除するようになる、というような問題を抱えることになります。イスラエルの信仰はこのような危険を回避し、見えない超越神、義なる神のみを礼拝する、ということで、その高い倫理性を確保してきたのです。エフーのイゼベルにしたことは、不義を全く許されない峻厳なる神様の表現として見るべきです。エフーがその実行の手足となりました。しかし、エフーが自らの権力の確立のためのこのような異教討伐を利用するようになると「主なる神」の恵み・祝福は遠ざかっていきます。10:31では「エフーは、心を尽くしてイスラエルの神、主の律法に歩もうと心がけず、イスラエルに罪を犯させたヤロブアムの罪から離れなかった」といわれており、軍事的にシリアに敗北する結果となり、その後死ぬことになります。正直なところ、このような残虐な事、数多くの戦争、そして不信仰者を徹底的に滅ぼす「聖絶」など理解に苦しむ箇所が旧約聖書には数多くあります。あまり無理して解釈しようとすると変なことになりかねませんので、時には私たちの理解できない神様の意志、として解釈保留するのが良い時もあります。但し、私たちにはこの義なる神様への仲保者、贖い主イエス・キリストがおられる、ということを思い出す必要があります。

　前置きが長くなりましたが、本日の聖書箇所に入ります。エフーが時の王ヨラムへの反乱を始める段階の箇所です。17-18節をもう一度お読みいたします。「イズレエルのやぐらの上に、ひとりの見張りが立っていたが、エフーの軍勢がやって来るのを見て、「軍勢が見える」と言った。ヨラムは、「騎兵ひとりを選んで彼らを迎えにやり、お元気ですかと、尋ねさせなさい」と言った。18 そこで、騎兵は彼を迎えに行って言った。「王が、お元気ですかと尋ねておられます。」エフーは言った。「元気かどうか、あなたの知ったことではない。私のうしろについて来い。」一方、見張りは報告して言った。「使者は彼らのところに着きましたが、帰って来ません」、とあります。イズレエルというのはエズレルとも訳され、オムリ王朝後期の三代の首都のことです。そこに、王ヨラム、母エズレルも居たのです。王の見張り番がエフーが攻め上がってくるのを見ました。王ヨラムは騎兵ひとりに命じ、エフーに「お元気ですか」と尋ねさせました。この言葉は「シャーローム」です。「シャーローム」は日本語で言えば「こんにちは」とか「ご機嫌いかがですか」というような挨拶ことばです。この言葉で、エフーは何をたくらんでいるかさぐりだそう、としているのです。これに対し、エフーは「元気かどうか、おまえの知ったことではない」とやり返します。この部分は直訳しますと「お前にはそれが何だ」と言う表現です。ヘブル語では2語だけの簡潔な言い方です。そしてエフーはこの使者を家来にしてしまいます。王エラムはもう一人騎兵を使者として送りますが同じ結果です。見張りは“エフー将軍が来た。大変だ。大変だ”と叫びまわります。そこには、ヨラム王と戦争になろうとしていた南王国ユダのイズレエル王もおり、それぞれ、エフーに挨拶に行きます。会見の場はイズレエル人ナボテの所有地でした。このナボテという人物は第一列王記21章にでてきます。今の王ヨラムの父アハズがナボテの葡萄園が欲しくなり、売ってくれ、と言いましたが、ナボテは「先祖からの地だ」という理由で拒否します。それを聞いた妻イゼベルはナボテに計略をかけ「神と王をのろった」として石打ちの刑にして殺してしまいます。このとき、預言者エリアはアハズの子孫に災いが起きることを宣告します。イゼベルについては犬に食われる、と預言します。さて王ヨラムはエフーに「元気か」と問いかけます。これも「シャーローム」です。22節から24節までを読みますと、「ヨラムはエフーを見ると、「エフー。元気か」と尋ねた。エフーは答えた。「何が元気か。あなたの母イゼベルの姦淫と呪術とが盛んに行われているかぎり。」 23 それでヨラムは手綱を返して逃げ、アハズヤに、「アハズヤ。悪巧みだ」と叫んだ。 24 エフーは弓を力いっぱい引き絞り、ヨラムの両肩の間を射た。矢は彼の心臓を射抜いたので、彼は車の中にくずおれた」と記されています。エフーは「何が元気か」と一蹴し、イゼベルの悪行が続いている限り「シャーローム」はありえない、と言っています。「シャーローム」のそもそもの意味は「神との平和」ですから、ここでは、イゼベルが居る限り、「神との平和」即ち真の平和な時はおとづれない、と言っているのです。本日の聖書箇所では「シャーローム」が相手の出方をうかがう、という邪悪な目的で使用されていますが、この背後には「神との平和」というイスラエル信仰の強い希望のメッセージが隠されているのです。王ヨラムはユダ王国の王アハズヤに「謀反だ」と叫び逃げようとしますが、エフーの弓により殺されます。南王国のアハズヤは逃げようとしますが。若干、東北に行った町メギドで追手に殺されます。このあとエフーは王ヨラムの死体を「ナボテの畑」に投げ捨て、イゼベルを馬の足で踏みつけ、予言通り、犬に食わせます。一応、葬りはします。これが「エフー革命」と言われているエフーのクーデタです。彼はヤーヴェ信仰の復活を図りますが徹底せず、民衆のバアル信仰も強く残ります。結局、列王記記者は北王国についてはすべての王を否定的に評価しています。中ではエフーは若干ましに見られている、という程度です。しかし、この世の王としての評価でみれば、オムリ王朝のオムリ、アハズ、エフー王朝のエフー、後のヤラベアムII世はイスラエル王国の繁栄をもたらした王です。王国としての繁栄と信仰的に純粋であることとは矛盾することが多いのは現代においても変わっていません。

　最後にここで出てきた「シャーローム」という言葉をみてみましょう。本日の箇所のように挨拶ことばとして使用されているのはむしろ少なく、237回中113回は「平安、平和」の意味で使用されています。イザヤ書57:19を例として見てみましょう。主なる神の言葉がイザヤに臨んでいます。「わたしはくちびるの実を創造した者。 平安あれ。遠くの者にも近くの者にも平安あれ。 わたしは彼をいやそう」とあります。創世記15:15では主なる神がアブラハムに「あなた自身は、平安のうちに、あなたの先祖のもとに行き、長寿を全うして葬られよう」と言われています。私たちの言葉で言い直せば「シャーローム」とは神の国の在り様を言っているようです。「神共にいます」の世界、ということでしょう。辞書でみると、「全きこと」、「繁栄」、「成功」、「平和」、「元気」、「健康」、「親切」、「救い」というような多様な意味が挙げられています。この動詞形は「完成する」「終わる」と言う意味です。派生して「償う」、「和を結ぶ」の意味も生まれています。私たちの信仰から見れば終末の時に、主が再臨し、神の国が完成した時の状態を表している、と言えるでしょう。“神様との関係が正しくなっている”というのがそもそもです。それが人と人の関係にもおよび争いのない愛の関係にある状態です。当然、戦争は廃絶されています。新約での用例はいかがでしょう。ギリシャ語では「エイレーネー」といいます。92回出現のうち、88回は「平和」「平安」です。山上の説教マタイ5:9の「平和を作る者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから」における「平和を作る者」は「エイレーネー」の変化形です。争いをなくす人の意味でしょう。エペソ書2:14では「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし」と言われています。断絶した関係からキリストにあって隣人としての関係を復活する事を指していると思われます。あと忘れてはならないのはパウロの手紙でのあいさつのことばです。第一コリント1:3に「私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように」とあります。この表現は何度もでてきます。主よりの恵みを得て、安らかな心を保ちなさい、ということでしょう。旧約での「シャーローム」は終末的状況での「神との平和によるイスラエルの平安」という「希望」の意味合いですが新約での「エイレーネー」は「主イエスにより神との平和が回復され、隣人との平和が齎される」という既に現実化した状況を想定しています。「神共にいます」という旧約の願いと「希望」は、新約においては現実化し、ここにある、ということです。これこそ「福音」なのです。私たちは「平和の使徒」として招かれています。祈ります。（ご在天の父なる御神様、今日ここに皆を呼び集め主の御言葉を聞く機会をお与えくださいましてありがとうございます。今日は、北イスラエルにおける偽りの平和の時を見ました。私たちは主イエス・キリストの贖いにより神様との真の平和に入れられたものです。その喜びと感謝をもって信仰生活を生きることができますよう導いて下さい。主のみ名によって祈ります。アーメン）。